星の城、明日に輝け

北海道教育大学附属函館中学校　太田陽　３年

「ズダダダ、バーン。」
新政府軍の銃撃によって、膝から崩れ落ちる土方歳三。
『副長―!!』
元新選組隊士の叫びが胸を締め付ける。
一九八八年に第一回公演が行われて以降、市民ボランティアによって受け継がれてきた「市民創作『函館野外劇』」縄文時代から始まり、今の函館に繋がるまでの物語。劇中のフラッグパフォーマンスやよさこいでは、観客も手拍子で参加し、一体感が生まれる。
函館に引っ越して来てから、五年目にして初めて観劇した去年の夏。
「素人のボランティア劇だから、大したことないかもしれないけど、せっかくだから一度は見てみようよ」と母に誘われ、軽い気持ちで五稜郭公園内の特設ステージの席に着いた。時代を追っていくなか迎えた箱館戦争。剣を交える乾いた音、地を蹴って上がる砂煙、火薬の匂い、響く大砲の音。真剣な眼差しで対峙する旧幕府軍と新政府軍。その空気に圧倒される。
「ズダダダ、バーン。」
『副長―!!』
この叫びに、私の心も射抜かれた。
「なにこれ！すっごく面白いんだけど！」
今まで見てこなかったことを激しく後悔した。
今年、第三十五回公演の全日程六日間のうち四日間足を運んで、配役の違いやたまに起こるアクシデントを楽しませてもらった。
「函館野外劇ってすごいね！」って友達に言うと、「あ〜、知ってるけど行ったことなーい」と返ってくる。聞けば、地元でも見たことがない人が多いらしい。栃木から引っ越してきた私は、以前の土地ほど函館に愛着がなかったが、「函館野外劇」に出会って知った、高田屋嘉兵衛やペリー提督が惚れた港。武田斐三郎が築き、土方歳三が守った星の城・五稜郭。函館大火を乗り越えて、築かれた街並み。知れば知るほど、この函館の街を好きになった。
「函館野外劇」が推しになったことで、「栃木に帰りたい」から「函館に住んでいたい」に変わると同時に、演じる一員になりたいと強く思った。緊張で震える手で電話をかける。
「殺陣チームの練習に参加させてください」。この一歩から、新しい推し活動が始まる。
あの舞台でいつか私も叫ぶ。
「副長―！」